

『さまよえる猶太人』論

金熙照*
khj134@unitel.co.kr

〈目次〉

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. はじめに | 5. 傍観者のこと |
| 2. 猶太人のこと | 6. 自省者のこと |
| 3. 芥川とクリスト | 7. おわりに |
| 4. 『死んだ兄』のこと | |

主題語: 猶太人(Jew)、クリスト(Christ)、十字架(the Cross)、自省(self examination)、呪い(curse)

1. はじめに

本作品は大正六年の『新潮』に発表された、芥川竜之介の所謂キリシタン物に属する作品である。周知のように芥川は古今東西の古典を自家薬籠中の物のように利用し、作品を描いてきたが、この作品も例に漏れずヨーロッパの国に伝わっている『さまよえる猶太人』の伝説に材を仰いでいる。十字架を背負ってゴルゴダの丘に向かうイエスを嘲弄して、イエスから<行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ>という詛いを受けたヨセフを借りて、作品を展開しているのである。すなわち、最後の審判の日が来るまで、さ迷わなければならない運命を背負ったヨセフを主人公にして、芥川は自分の作品世界を描いているのである。本作品をめぐる従来の論として、足立直子は佐藤泰正の<宗教的関心>を挙げながら、

ヨセフがクリストの眼に「悲しみも悦びも超越した、不思議な表情」を見、また「なつかしい気」を抱く場面に注目するならば、そこには、後年の芥川のキリストへの関心にも通じる心情が読み取れる。

* 조선대학교 외국어대학 일본학과 부교수

1) 足立直子(2000)『さまよえる猶太人』(『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版)に拠る。p.205

と論じている。なお、安田義明は「技巧的な面がやや看過されたきらいがある」といって、次のように触れている。

いわゆる切支丹物の第一作「煙草と悪魔」での「伝説」の設定、第二作「尾形了齋覚え書」の候文の書簡体を経て、第三作の本作品では、虚構の写本を実在の文献資料とないまぜにする、という方法を編み出している。これは、後に「奉教人の死」で結実し、さらに谷崎潤一郎の名作「少将慈幹の母」へも繋がって行くのではないだろうか²⁾。

また、石割透は「『老狂人』とモチーフの点で共通している」といい、次のように述べている。

「老狂人」の＜秀馬鹿＞がこの作での＜クリスト＞であり、＜クリスト＞をとり巻く俗衆は、「老狂人」の＜幸さん＞と重ね合わされよう(中略)この作品のモチーフは、青年期からもちこされている芥川の本質に触れた重い問題が隠されているような気がする³⁾。

従来論は、主に芥川の宗教の問題や他の作品との関わりについて論じられた。が、本論ではテキストを読み直し、「さまよえる猶太人」に託した作者芥川思想に迫っていきたいと思う。

2. 猶太人のこと

テキストは章立てなしに、さまよえる猶太人の伝説に纏わる記事を紹介しながら展開している。あらすじは次のようである。主人公の「自分」は「さまよえる猶太人」に會ってから、二つの疑問を持っていたが、その疑問が古文書によって解消されたことを公表したいと云う。その疑問というのは、第一は「さまよえる猶太人」が渡日したことがあるか。第二は、十字架を背負いゴルゴダの丘に向かうイエス・クリストを嘲弄した者は数多くいるはずなのに、どうして猶太人・ヨセフ一人がイエスの呪いを受けたかという疑問である。そして「自分」はこの二つの疑問を解くため、さまざまな古文書を読み漁ったが、失敗に終わる。とこ

2) 安田義明(2002)「さまよえる猶太人」(『芥川龍之介大事典』勉誠出版)に拠る。p.476

3) 石割透(1992)「『さまよえる猶太人』『二つの手紙』『或日の大石内蔵之助』－＜噂＞の中の主人公(『＜芥川＞とよばれた芸術家』有精堂)に拠る。pp.18-19

ろが、偶々入手した「文禄年間のMS S」から、その疑問を解くことになる。「ふらんしす上人さまよえるゆだやびとと問答の事」に「さまよえる犹太人」の記述が詳しく書かれていたのである。第一の疑問である「さまよえる犹太人」が日本に渡来したかの事は、フランシス・ザヴィエルが「平戸から九州の本土へ渡る船の中」で出会ったと云う。第二の疑問に対する答えはヨセフを以て次のように語らせている。

罪を知ればこそ、呪もかかったのでござる。罪を罪とも思わぬものに、天の罰が下ろうようはござらぬ。云わば、御主を磔柱にかけた罪は、それがしひとりが負うたようなものでござる。但し罰を受ければこそ、贖いもあると云う次第ゆえ、やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにきまりました。罪を罪と知るものには、総じて罰と贖いとが、ひとつに天から下るものでござる⁴⁾。

『さまよえる犹太人』 p.391

つまり、本作品のテーマは第二の疑問への答えである「罪を知ればこそ、呪もかかったのでござる」という言葉に凝縮されている。では、テキストを冒頭部から読み直しながら、この言葉の意味を考えてみよう。テキストは<基督教国にはどこにでも、「さまよえる犹太人」の伝説が残っている>とあって、「さまよえる犹太人」の伝説についての記事から始まる。「さまよえる犹太人」というのは、十字架を背負ったイエス・クリストを嘲弄したため、イエスの呪いを受け、「最後の審判の来る日」まで、さ迷わなければならない運命を担ったヨセフである。

彼は、ゴルゴダへひかれて行くクリストが、彼の家の戸口に立止って、暫く息を入れようとした時、無情にも罵詈を浴せかけた上で、散々打擲を加えさえた。その時負うたのが、「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ」

『さまよえる犹太人』 p.380

イエス・クリストを嘲弄したヨセフは、その罰として世界の各国をさ迷う運命を担う事になる。そして、語り手は、その事実を裏付けるように、猶太人が「千七百二十一年六月二十日」西ドイツの「ウムニッヒ」に出現したことを、ドイツの歴史家「ホオルマイエル」の書いた「タッシェン・ブウフ」の中の記事を挙げて語っている。それから猶太人が現われた事実を文献を挙げながら仔細に列挙する。つまり、猶太人は十三世紀から十八世紀に「イギリス、フ

4) テキストの引用は「さまよえる犹太人」(『芥川竜之介全集1』ちくま文庫 2011年)に拠る。

ランス、ドイツ、ベルギ、チェコスロバキア、デンマク、スウェデン、スペイン」などのヨーロッパの各地で現われたが、十八世紀以後には行方を晦ましたと云う。問題はこの猶太人についての情報ではなく、「自分」が平素猶太人にある疑問点を持っていることである。それは、猶太人が日本に渡来したかということである。もう一つは、何故彼一人がイエスキリストの呪いを受けたかという事である。第一の疑問点について語り手は次のように語っている。

第一の疑問は、全く事実上の問題である。「さまよえる猶太人」は、ほとんどあらゆる基督教国に、姿を現した。それなら、彼は日本にも渡来した事がありはしないか。現代の日本は暫く措いても、十四世紀の後半において、日本の西南部は、大抵天主教を奉じていた(中略)大名と呼ばれた封建時代の貴族たちが、黄金の十字架を胸に懸けて、パアテルノステルを口にした日本を、——貴族の夫人たちが、珊瑚の念珠を爪繰って、毘留善麻利耶の前に跪いた日本を、その彼が訪れなかったと云う筈はない。『さまよえる猶太人』 p.383

「自分」は「第一の疑問は、全く事実上の問題である」と述べている。猶太人が日本に出現したことを、十四世紀日本の貴族たちと夫人たちの信仰生活の一断面を挙げて語っている。これは「さまよえる猶太人」が日本に渡来した事を、読者に信憑性を持たせるためである。読者は語り手の例証に頷けることになるのであろう。作者芥川はこういう歴史的な事実を作品の中に入れて、読者にリアリティを与えているのである。では、猶太人が日本に渡来した事を疑問点に挙げた意図は那邊にあるのであろうか。先に述べたように「さまよえる猶太人」はヨーロッパの基督教国に現われていたが、彼が十四世紀の日本にも現われた事を浮き彫りにして、作者芥川は猶太人と一体感を持とうとしたのである。それによって第二の疑問点、すなわち何故彼一人がイエスキリストの呪いを受けなければならなかったかという事が、芥川の問題でもあるという事を匂わせる為である。このような相関関係を読者に認識させた語り手は、すぐ第二の問題点を提起している。この第二の問題点を取りも直さず、芥川自身の言いたい所でもある。そういった意味合いで、語り手は「第二の疑問は、第一の疑問に比べると、いささかその趣を異にしている」と述べているのである。これは読者に注意を呼び起こし、これから語ろうとする第二の疑問に本当のテーマが入っているという事を知らせる為である。第二の疑問は先にも述べたように猶太人一人がイエスキリストの呪いを受けた事である。

3. 芥川とクリスト

語り手が語る第二の疑問は、曾てから自分が抱いていた疑問であり、この疑問に関する解答も探せないと云って次のように語っている。

クリストが十字架にかけられた時に、彼を窘めたものは、独りこの猶太人ばかりではない。あるものは、彼に荊棘の冠を頂かせた。あるものは、彼に紫の衣を纏わせた。またあるものはその十字架の上に、I・N・R・Iの札をうちつけた。石を投げ、唾を吐きかけたものに至っては、恐らく数えきれないほど多かったのに違いない。それが何故、彼ひとりクリストの呪を負ったのであろう。

『さまよえる猶太人』 p.384

「自分」はこの疑問点を解くため、さまざまな文献を読み漁ったが、ついにその答えを見出だせなかったと云う。ところが、「自分」は疑問点の手がかりになる古文書を探しに「両肥」と「平戸天草の諸島」をめぐる、漸く「さまよえる猶太人」の伝説を手に入れたと云う。それは「ふらんしす上人さまよえるゆだやびとと問答の事」という「文禄年間」の覚え書である。その覚え書によると、猶太人は船の中でフランシス・ザヴィエルと出会ったとある。船に乗った彼はフランシス・ザヴィエルから「そなたは何処のものじゃと」聞かされ、「一所不住のゆだやびと」と答えたとある。フランシス・ザヴィエルは念のため「当来の波羅華僧にかけても、誓い申すべきや」と聞いてみたが、猶太人は「誓い申す」と答えたとある。これで「さまよえる猶太人」は日本に渡来したかという第一の疑問点は解かれたことになる。フランシス上人は船に乗った紅毛人が「さまよえる猶太人」に違いないと知ってから、彼と色々問答をしたと云う。上人は彼にイエス・クリストに呪いを受けた当日の状況を聞かされることになる。なお、猶太人はその当日の状況の一部始終を仔細に語る。彼は目のあたりに苦しむイエスを見たのであるが、彼の眼に映ったイエスの姿は神の子ではなく、普通の人間に見えたのである。

クリストは、「物に狂うたような群集の中を」、パリサイの徒と祭司とに守られながら(中略)が、眼だけは、ふだんと少しも変りがない。「日頃のように青く澄んだ御眼」は、悲しみも悦びも超越した、不思議な表情を湛えている。これは(中略)ヨセフの心にさえ異常な印象を与えた。彼の言葉を借りれば、「それがしも、その頃やはり御主の眼を見る度に、何となくなつかしい気が起ったものでござる。大方死んだ兄と、よう似た眼をしていられた

せいでもござろう。

『さまよえる猶太人』 pp.388~389

ヨセフはクリストの眼に「御主の眼」ではなく、「死んだ兄」に似たような眼を見たのである。その時の心境を彼は「異常な印象」として語っている。つまり、彼はクリストを「神の子」ではなく、「死んだ兄」に似たような人間として見ている。これは取りもなおさず作者芥川のクリストへの視線である。芥川は『ある鞭、その他(仮)』で基督教に関して次のように述べている。

一ある鞭

僕は年少の時、硝子画の窓や振り香炉やコンタスの為に基督教を愛した。その後僕の心を捉へたものは聖人や福者の伝記だつた。僕は彼等の捨命の事跡に心理的或は戯曲的興味を感じ、その為に又基督教を愛した。即ち僕は基督教を愛しながら、基督教的信仰には徹頭徹尾冷淡だつた。しかしそれはまだ好かつた。僕は千九百二十二年来、基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に屡短篇やアフォリズムをサウした。しかもそれらの短篇はやはりいつも基督教の芸術的莊嚴を道具にしてゐた。即ち僕は基督教を軽んずる為に反つて基督教を愛したのだつた。僕の罰を受けたのは必ずしもその為ばかりではあるまい。けれども僕はその為にも罰を受けたことを信じてゐる⁵⁾。

芥川は「僕の心を捉へたものは聖人や福者の伝記だつた。僕は彼等の捨命の事跡に心理的或は戯曲的興味を感じ」と述べている。なお、「その為に又基督教を愛した」と吐露している。芥川は「さまよえる猶太人」の伝説に基督教の信仰として関心を持っていたのではなく、「基督教の芸術的莊嚴」に興味を感じたわけである。つまり、クリストの眼を借りて「死んだ兄」の眼を投影し、芥川は自分のテーマを生かしているのである。言い換えれば、芥川はヨーロッパの「さまよえる猶太人」を、日本に來させ、なお、クリストの眼も「死んだ兄」の眼に置き換えて作品を描いているのである。

4. 「死んだ兄」のこと

「さまよえる猶太人」を日本に來させ、クリストの眼を「死んだ兄」に似せて描いた芥川

5) 「ある鞭、その他(仮)」(『芥川龍之介全集第二十三巻』岩波書店 1998年)に拠る。p.221

は、キリストをさらに「死んだ兄」のイメージを浮き彫りにして、猶太人に自分の思想を託している。十字架を背負い荊の冠を被らせたイエスは、苦しみを少しでも癒すため、ヨセフの戸口で休もうとする。そんなキリストをヨセフは辱めたのである。

ヨセフは、その「多くの人々の手前、祭司たちへの忠義ぶりが見せとうござったによって、」キリストの足の止めたのを見ると、片手に子供を抱きながら、片手に「人の子」の肩を捉えて、ことさらに荒々しくこずきまわした。——「やがては、ゆるりと磔柱にかつて、休まる体じゃなど悪口し、あまつさえ手をあげて、打擲さえしたものでござる。」

『さまよえる猶太人』 p.390

ヨセフはキリストを辱め、暴行さえ働いたが、キリストの眼に「死んだ兄」に似たような眼を覚えて、キリストを小突き回した片手を垂れ、暴行を止める。つまり、キリストの呪いを受けて、ヨセフは暴行を止めたのではなく、キリストの眼に「死んだ兄」に似たような眼を自覚したので、暴行を止めたのである。こういうことはヨセフの台詞によく表れている。

すると、キリストは、静に頭をあげて、叱るようにヨセフを見た。彼が死んだ兄に似ていると思った眼で、厳にじっと見たのである。「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待って居れよ」——キリストの眼を見ると共に、彼はこう云う語が、熱風よりもはげしく、刹那に彼の心へ焼け付くような気持ちがした。キリストが実際こう云ったかどうか、それは彼自身にも、はっきりわからない。(中略)「いても立っても居られぬような気に」なったのであろう。あげた手が自ら垂れ、心頭にあった憎しみが自ら消えると、彼は子供を抱いたまま、思わず往来に跪いて、爪を剥がしているキリストの足に、恐る恐る唇をふれようとした。

『さまよえる猶太人』 p.390

ヨセフはキリストの呪いの言葉について「キリストが実際こう云ったかどうか、それは彼自身にも、はっきりわからない」といっている。ヨセフはキリストの眼から「死んだ兄」が思い浮かんで、暴行を止め、さらに「心頭にあった憎しみ」さえも無くなってくるのである。なお、ヨセフは自分の行動に「後悔」の念が起こり、延いては切ない思いになって涙ぐむのである。

ヨセフは、茫然として、ややともすると群集にまぎれようとする御主の紫の衣を見送った。そうして、それと共に、云いようのない後悔の念が、心の底から動いて来るのを意識

した。(中略)ヨセフは眼に涙を浮かべながら(中略)いつまでも跪いたまま、動かなかった。

『さまよえる猶太人』 pp.390~391

ヨセフはクリストの眼から「死んだ兄」の眼に気付いて嘲弄を止めたのである。なお、クリストへの憎しみも和らぎ、さらに自分の行動を後悔し、涙ぐみさえたのである。すなわち、ヨセフは「死んだ兄」という家族愛、若しくは懐かしさによって動かされて、クリストへの嘲弄を止めたわけである。こういう家族愛は大正九年に発表した『杜子春』にもよく表れている。『杜子春』は『さまよえる猶太人』と同様に、中国の伝奇物語である『杜子春伝』を借りて、芥川が自分のテーマを書き上げた作品である。杜子春は人間世界に愛想を尽かし、仙人になろうとして、鉄冠子に仙術の秘法を教わりたいと懇ろに願う。鉄冠子は杜子春に仙人になるためには「決して声を出すのではないぞ」という条件を付ける。杜子春は「決して声なぞは出してはしません。命がなくなっても、黙っています」と堅く鉄冠子と約束する。しかし、杜子春は「畜生道」で馬に化けて鞭に打たれて苦しんでいる父母に出会い、鉄冠子との約束を破ってしまう。

馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じっと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです(中略)杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一声を叫びました。

『杜子春』

杜子春は父母の姿を見て、仙人になる一歩直前に諦めてしまう。それは仙人よりも、家族愛といった人間らしい生き方を選んだわけである。「さまよえる猶太人」の「死んだ兄」や『杜子春』の父母には、芥川の家族愛の一端が示されている。周知のように芥川は生後まもなく実母の発狂で、母の愛を受けることもなく育ったのであり、長姉初子はわずか七歳に夭折したのである。こういう事情を芥川は『点鬼簿』に表している。

僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髪を櫛卷きにし、いつも芝の実家にたった一人座りながら、長煙管ですばしば煙草を吸っている。(中略)僕は僕の母に全然面倒を見て貰ったことはない。何でも一度僕の養母とわ

ざわざ二階へ挨拶に行ったら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えている⁶⁾。

僕は一人の姉を持っている(中略)僕の「点鬼簿」に加えたいのは勿論この姉のことではない。ちょうど僕の生まれる前に突然夭折した姉のことである。僕ら三人の姉弟の中でも一番賢かったと云う姉のことである(中略)「初ちゃん」は恐らくは大きな目をしたまま(中略)僕はなぜかこの姉に、——全然僕の見知らない姉にある親しみを感している⁷⁾。 『点鬼簿』

先に述べたように芥川には長姉初子がいたが、彼女は風邪が拗れて七歳に惜しくも亡くなったとある⁸⁾。『点鬼簿』に表れているように「大きな眼」の姉に、芥川は「親しみを感じていた」のである。「さまよえる猶太人」のヨセフがクリストの眼に「死んだ兄」の眼を感じたのは他でもない。芥川はクリストの眼に、死んだ「大きな眼」の姉を感じていたのではないだろうか。だからこそ芥川はヨセフに、

それがしも、その頃やはり御主の眼を見る度に、何となくなつかしい気が起ったものでござる。大方死んだ兄と、よう似た眼をしていられたせいでもござろう。

『さまよえる猶太人』p 389

と言わしめていたのであろう。ここには発狂した母と若死にした長姉に対する芥川の切ない家族愛が「死んだ兄」の眼を通して込められているのである。

5. 傍観者のこと

ヨセフはクリストの眼に「死んだ兄」の眼を覚え、親しみを感じたので、クリストを辱めた自分の行動を後悔し、クリストの足に接吻しようとした。が、クリストは兵卒たちに連れられてヨセフの戸口から遠ざかって行ってしまったのである。ここで注目に値することは、クリストの足に接吻しようとした、ヨセフの純粹で切ない振る舞いを周りの人々は自分勝手に解釈してしまうということである。

6) 「点鬼簿」『芥川龍之介全集』岩波書店 1996年)に拠る。p.234

7) 前出書, pp.236-238に拠る

8) 福田清人(1978)「幼年時代の追憶」(『芥川龍之介』清水書院)によれば、芥川は「長男で、上に初子、久子の二人の姉があったが、長姉の初子は風邪がもとで七歳の時、亡くなった」とある。p.12

しかし、誰一人彼に同情してくれるものはない。彼の妻や子でさえも、彼のこの所作を、やはり荊棘の冠をかぶらせるのと同様、クリストに対する嘲弄だと解釈した。そして往来の人々が、いよいよ面白そうに笑い興じたのは、無理もない話である(中略)ヨセフは眼に涙を浮かべながら(中略)いつまでも跪いたまま、動かなかった。

『さまよえる猶太人』 pp.390~391

ヨセフの純粋な振る舞いを人々は嘲弄と勝手に見做してしまう。恐らく人々はヨセフの振る舞いを、「祭司たちへの忠義ぶり」を一段と見せたくてした事とさえ考えるかも知れない。ヨセフの振る舞いを「妻や子でさえ」嘲弄だと誤解したからである。ここには当事者とは関わりのない傍観者たちの勝手なエゴを示している。芥川はこのような傍観者の態度を『鼻』での内供を以て表していた。「鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんでいた」内供を「池の尾」の人々は無論のこと、誰一人同情してくれる者はない。却って自分勝手にいろいろ論うばかりである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合わせだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思ったからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さえあった。

『鼻』

「池の尾」の人々は、内供の「傷つけられた自尊心」など風馬牛の態度をとっている。剩え、内供の弟子でさえ、内供の陰では悪口を言ったのである。ヨセフの純粋な所作を勝手に解釈し「面白そうに」傍観する群集と、内供の苦しみとは風馬牛に、自分勝手に論う「池の尾の町」の人々には、傍観者のエゴを批判する芥川が思想が窺われるのである。

6. 自省者のこと

ヨセフは周りの人々の騒ぎと笑いの中で、往来に膝をついたまま切ない思いで涙する。

石を焦がすようなエルサレムの日の光の中に、濛々と立騰る砂塵をあびせて、ヨセフは眼に涙を浮かべながら、腕の子供をいつか妻に抱きとられてしまったのも忘れて、いつまでも跪いたまま、動かなかった。……

『さまよえる猶太人』 p.391

ヨセフはクリストの足に接吻しようとした自分の純粹な所作を、周りの人々から一人もわかってもらえない孤独な環境にいる。言わば、ヨセフは「群衆の中の孤独」を味わっているのである。しかし、その群衆の中にヨセフは居ながら、自分がクリストに行なった行動について自省したのである。それは自分の行動を罪と自省したことである。他人はクリストへの嘲弄を罪と思わないが、ヨセフ自身はそれを罪と認識したのである。それ故「やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにきわまりました」と、ヨセフは自慰しているのである。「罪を罪とも思わぬもの」にはクリストの救拔もないということである。これは救いというのは、自己行為を認識し、その行為に自省を促した者のみができるものだという芥川思想である⁹⁾。こういう芥川思想は本作品の四ヵ月後に発表した『戯作三昧』にもよく表れている。

この時彼の王者のような眼に映っていたものは、利害でもなければ、愛憎でもない(中略)あるのは、唯不可思議な悦びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が未到されよう。どうして戯作者の儼かな魂が理解されよう。
『戯作三昧』

馬琴は今自分が置かれている状況を認識し、自分の行為を自省し、なお、内外のあらゆる困難を乗り越えて、やがて創作者のみが味わえる「戯作三昧の心境」に浸ることができたのである。このようなことは『地獄変』の良秀にも表れている。良秀は檳榔毛の車に乗せられ焼かれて死ぬ最愛の娘を、目の前で見ることになるが、語り手はその際の良秀の様子を次のように語っている。

何と云う不思議な事でございましょう。あのさっきまで地獄の責苦に悩んでいたような良秀は、今は云いようなない輝きを、さながら恍惚とした法悦の輝きを、皺だらけな満面に浮かべながら、大殿様の御前も忘れたのか、両腕をしっかりと胸に組んで、佇んでいるではございませんか。それがどうもあの男の眼の中には、娘の悶え死ぬ有様が映っていないようなのでございます。唯美しい火焰の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悦ばせる——そう云う景色に見えました。
『地獄変』

9) 駒尺喜美(1979)『認識者の没落』(『芥川龍之介の世界』法政大学出版局)に「この作品のテーマは、罪を知る者、自覚者こそが永遠に苦しむというところにあり、そしてまた、その苦しむ者こそが救われる、というところにある」という論がある。p.59

良秀が火炎の中の娘を目の前にして「法悦の輝きを皺だらけな満面に浮かべ」たのは他でもない。日頃、猿は娘に可愛がられていたが、その猿が燃え上がっている車の中で苦しんでいる娘のところに飛び込んだからである。言い換えれば、猿の行為に良秀は、父として自分がやるべき行為を見たからである。猿は良秀の代わりに火炎の中に飛び込んだのである¹⁰⁾。そのような猿の行為が良秀の「心を悦ばせ」たのであり、「法悦の輝きを満面に浮かべた」のである。語り手と大殿とその家臣たちは、そのような良秀の心境は知らない、知るはずもないわけである。猿の行為は良秀のみが感じる「法悦の輝き」であり、「限りなく心を悦ばせる」ものであったのである。

7. おわりに

ヨセフは兵卒に連れられて遠退いて行くイエスを見送りながら、一人膝をついたまま自分の行為について涙ぐんで自省する。

されば恐らく、えるされむは広しと云え、御主を辱めた罪を知っているものは、それがしひとりでござろう。罪を知ればこそ、呪もかかったのでござる。罪を罪とも思わぬものに、天の罰が下ろうようはござらぬ。云わば、御主を磔柱にかけた罪は、それがしひとりが負うたようなものでござる。但し罰をうければこそ、贖いもあると云う次第ゆえ、やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにきわまりました。罪を罪と知るものには、総じて罰と贖いとが、ひとつに天から下るものでござる。『さまよえる猶太人』 p.391

ヨセフは<御主を辱めた罪を知っているものは、それがしひとりでござろう。>と自分の罪を悟っている。罪を悟っているゆえ、<但し罰をうければこそ、贖いもあると云う次第ゆえ、やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにきわまりました>と自らを慰めている。芥川は作品の結びに上記のヨセフの自省について、<自分の最後の第二の疑問に答えている。この答の当否を穿鑿する必要は、暫くない>と記している。これはそのま

10) 小野隆(1991)「地獄変」論(『専修国文第48号』専修大学国語国文学会)は、<猿の心は父たるの思いに充ち満ちている(中略)猿は火炎を肉体の苦しみとして苦しむなら、火の外へ逃げることができる。逃げない猿の泣き声は、父としての悲しみ苦しみの泣き声以外ではありえない。猿は父としての行為に死ぬのである。良秀はその猿に自らの父としての苦しみと行為を見たはずだ。>と指摘している。p.57

ま、ヨセフの自省に作者芥川が思想が投影しているということである。芥川はヨセフを以て、自己の行為を認識し、その行為に自省をした者のみが感じる安らぎと救いを描いたのである。ヨセフはクリストを辱めた自分の行為を罪と悟っていた。そして芥川は、その行為に自省をしたヨセフに「御主の救拔」を与えている。芥川は真相を知らなく、自分勝手に論う傍観者の中で、自分の行為を悟って自省し、充実して生きる人生に重きを置いているのである。

【参考文献】

- 駒尺喜美(1979)『芥川龍之介の世界』法政大学出版局, p.59
福田清人(1978)『芥川龍之介』清水書院, p.12
石割透(1992)『<芥川>とよばれた芸術家』有精堂, pp.18-19
関口安義・庄司達也(2000)『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版, p.205
志村有弘(2002)『芥川龍之介大事典』勉誠出版, p.476
小野隆(1991)「地獄変」論『専修国文第48号』専修大学国語国文学会, p.57
『芥川龍之介全集第十三巻』岩波書店 1996年 p.234、pp.236-238
『芥川龍之介全集第二十三巻』岩波書店 1996年 p.221

논문투고일	: 2012년 03월 10일
심사개시일	: 2012년 03월 20일
1차 수정일	: 2012년 04월 10일
2차 수정일	: 2012년 04월 16일
게재확정일	: 2012년 04월 20일

 <要旨>

「さまよえる猶太人」論

本作品は大正六年の『新潮』に発表された、芥川の所謂キリタン物に属する作品である。この作品はヨーロッパの国に伝わっている『さまよえる猶太人』の伝説に材を仰いでいる。十字架を背負ってゴルゴダの丘に向かうイエスを嘲弄して、イエスから<行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待って居れよ>という詛いを受けたヨセフを借りて、作品を展開しているのである。すなわち、最後の審判の日が来るまで、さまよわなければならない運命を背負ったヨセフを主人公にして、イエスを嘲弄した自分の罪を認識し、自省を促した者のみが感じる安らぎと救いを描いている。芥川は作品の結びのヨセフの自省について、<自分の最後の第二の疑問に答えている。この答の当否を穿鑿する必要は、暫くない>と記している。これはそのまま、ヨセフの自省に作者芥川の思想が投影しているということである。芥川は真相を知らなく、自分勝手に論う傍観者の中で、自分の行為を自省し充実して生きる人生に重きを置いているのである。

A Study on “The Wandering Jew” by Akutagwa Ryunosuke

“The Wandering Jew” was published in the magazine Sincho in 1917. This short story is one of Akutagwa Ryunosuke’s Christian works. This work is written base on the “The Wandering Jew” of Europe. Akutagwa describes Joseph, who make a fool of Jesus carrying a cross on his back toward the hill of Golgotha. That is to say, Akutagwa describes Joseph as the main character, who must wander until the day of doom comes. He also describes Joseph’s peace and redemption from recognizing and regretting about his guilt concerning making a fool of Jesus. What Akutagwa says about Joseph’s regret is in the form of the Narrator’s solution to a question posed. There is no need to discuss whether it is right or wrong. Joseph’s peace and redemption are the author Akutagwa’s thought. The theme of this work expresses the humanism of Akutagwa Ryunosuke.